

社会調査と数量化

林 知己夫

勝井：シンポジウムに入りますが、これからの司会は、本学部の研究委員が担当いたします。最初、林先生の御講演に対しましては、金さんが担当します。

司会(金)：本学部の金と申します。

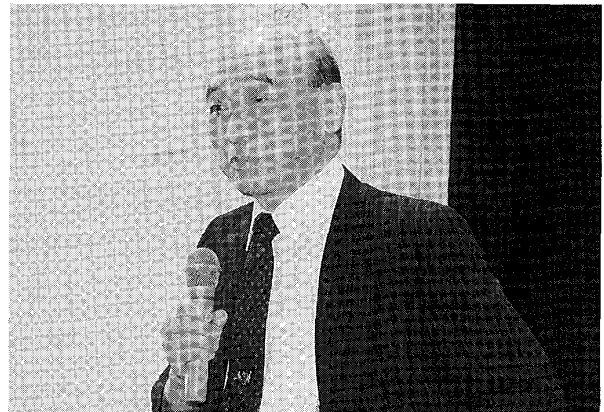
多くの方々には既に御存じだと思いますが、林先生の御経歴と御業績を詳細に紹介するにはかなりの時間が必要です。時間の都合で簡単に林先生の御略歴を紹介させていただきます。

林先生は、1942年東京大学理学部の数学科を卒業なさいます。1947年から1986年まで文部省統計数理研究所にて御勤務なさいました。この期間中、1974年から1986年までの12年間、研究所の所長の要職を御担当なさいました。文部省統計数理研究所を退職なされた後、1991年までは放送大学の教授を歴任され、現在でも多くの大学・研究機関で研究や教育にご活躍なさっていらっしゃいます。

林先生は、日本統計学会、日本行動計量学会、日本計量生物学会、日本分類学会など複数の学会の会長を歴任なさいました。

話が統計学に移りますが、統計学については、日本は世界に大きく貢献しています。そのなかで、もっとも海外で知られているのは、数量化理論、田口理論、赤池情報量ではないかと思えます。

数量化理論は、林先生が御提案なさったデータ解析の方法ですが、今は林の数量化I類、林の数量化II類、林の数量化III類、林の数量化IV類と名づけられております。



林 知己夫 氏

林先生は、データ解析の方法論の研究だけではなく、人文科学、社会科学、医学など広い分野で御研究なさっていらっしゃいます。データ解析の方法論の研究をなさっている研究者の中で、林先生のように人文科学、社会科学などの分野で緻密に研究をなさっている研究者は、世界に例がないのではないかと思っております。

林先生の御著書と論文を合わせると1,000を超えているそうです。時間の都合で詳細な紹介は省略させていただきます。

きょうの講演のテーマは、ごらんのとおりに「社会調査と数量化、— 国民性研究とデータ科学」です。社会調査と国民性は社会科学の範疇で、数量化とデータ科学は情報科学の範疇で、社会情報科学にふさわしい内容であると思っております。早速ですが、林先生のご講演を始めようと思っております。林先生、どうぞよろしくお願いいたします。

林：今、大変な御紹介させていただきましたけれども、林でございます。

きょうお話ししますのは、社会調査と数量化、それは一般の題目でございまして、内容的には国民性研究とデータの科学、こういう話はどうしても二足のわらじを履くことになります。一方では、どうしても国民性の話をしなければいけませんし、一方では、データの科学の話をしなければいけないわけがございます。それでは本当はおもしろくないので、二つが一緒になったところがおもしろいわけでございます。そこがまさに社会情報科学になるわけでございますが、話としてはどうしても二つやらないとわかりにくいのです。簡単に二つをやりまして、あと結果をお話ししますと、なぜそれが出てきたのだろうかという、今度また心配になるわけでございます。いろいろと心配な点が出てまいります、その辺はひとつですね、二つの話を聞いていただきまして、自分の中でそれを結びつけていただきたい。なるべく結びつけられるような話をいたしますけれども、そこのところは私の中では結びついている部分でございまして、話をするとき同時にはなかなかそれを結びつけがたいという点があります。

最初に、それでは国民性とは何かという問題が起こってまいります。現在、なぜこういう問題を取り上げるかということは、これは昔取り上げたわけでございます。国民性研究を始めましたのが1953年、45年以上経過したわけでございます。その当時、取り上げた発想としては、大体社会調査の方法ができ上がってきた、このまま小さいことをやってもこれ以上発展させることはできないと考えて、何か大きい問題をやって新しい問題を見つけてこようではないかということで出発したのが国民性研究でございまして。

当時、日本では国民性論が非常に盛んでございました。戦前の裏返しで、伝統の否定、全く否定する、これをしない限り日本の将来はない、こういう話が非常に多く世の中に出ておりました。戦前では非常に偉い、偉いと

言ったわけでございますが、話が何が本当かわからないということで、ひとつ現在の日本人は一体どうなんだろうかということ、今までの方法と全く違った方法で明らかにしたい。違った方法というのは統計的方法であると、こういうふうに考えたわけでございます。

そして、だんだん始めていくうちに、国際比較も必要である、日本を外から見なければやはりわからないじゃないかということで、外から見ることを考え出しました。それで話が国際比較に移っていったわけです。そうするとまた国際比較というのはそんな簡単なものではございません。また、これで方法論をつくらなければいけないということで、方法論の方に戻ってきたわけでございます。

そんなふうにして国際比較をやっておきますと、どうもその、話が大きくなりますが、世界の文明の問題というものは、国民性と宗教を抜きにしては考えられないということに気がついてまいりました。これでいよいよこの問題をこれから取り上げようと、こういうわけになります、まだこれをやっておりません。これが将来取り上げたいと思っておるわけでございます。

最近であります、ハンチントンという人が、文明の衝突という本を書きました。御存じの方はあると思いますが、それを見て驚きました。やはり文明の衝突、まさに我々と同じ考えでございまして、文明の衝突というのはなぜ起こるか。それはいろいろな文明があるからで、結局、極言すれば、すべての国がアメリカ文化を取り入れて、これに同調するならば衝突はなくなる。極言すればそういう理論でございまして。いや、これを見て驚きました。ところがですね、残念ながら彼の例外がございまして。日本でございまして。

日本はさっぱり取り入れていない、それでどうしてあれだけ繁栄しているのだろうか。彼は非常に悩むのでありました。その辺になってくると、論旨が極めてあいまいに

なっまってまいります。日本が目の上のたんこぶです。そういうことが出ておまして、これはまたひどい話で、そういうふうなアプローチというのはこれほとんどない話ではないかと思ひます。一頃はやったコンヴァージェンス理論も同様な考え方で、文明が進歩するとみな同じものに収束するという考え方です。やっぱりこれはアメリカ人の国民性の一つではないだろうかと思ひておるわけがございます。これはアメリカ論は別にまたやらなければいけないわけがございますが、それがアメリカの考えを端的にあらわしていると私は思ひます。

ですから、例えば社会調査の方法をやりましても、アメリカ人はアメリカ的な社会調査の方法が世界に通用すると思ひているのです。アメリカ人のクエシヨンは世界に通用すると思ひているのです。日本人もカブれてしまつてみんなそうだと思ひてしまつて居るのです。我々が見ると、アメリカ人のつくつた質問は極めてアメリカ的である。日本人のつくつた質問は極めて日本的である。これを理解しなければいけないと思ひます。その上に立つて、何を導き出すかということがデータの科学の問題になるわけがございます。そこを比較したい、そういう問題でございます。

いずれにしても、やはり文明の衝突ということは確かでございます。それにはやはりいろいろな国民性が存在する、宗教の問題もそうでしょう。しかし、それはどれがどれを否定するということはできない。その中で何を考えるかということが新しい文明論の根本につながるのではないかと。そういうことがデータを通して明らかになってくるのではないかと、こういうふうにご考へておるわけでございます。

ちょっと話の前段階が長くなりました。では国民性とは何かという問題でございます。これはなかなか難しいのでありまして、我々とすれば物の見方、考え方、感じ方だろうと、

こういうふうにご理解して居ます。これをですね、では外国語に翻訳しますときにナショナルキャラクター、ナショナルキャラクターといふとなかなかいろいろ問題が多いわけで、そこで、何と訳すかと。訳した。ビリーフ・システム (belief systems), ザ・ウェイ・オブ・シンキング (The way of thinking), センティメント (sentiments), その集団的特性である。見方、考え方、感じ方の集団特性です、こう訳したところが、あるアメリカ人が言ひまして、ザ・ウェイ・オブ・シンキング、そんな言葉はない、どこにもない。それは英語ではないのだと、こういうわけでございます。ああ、そういうものかなと思ひて居たのでありますが、このごろいろいろな本を見ますと、あるのです。いっぱい使つて居ます。アメリカ人といふのは自信が強いのです。ちょっと違ふとそれはだめだと、こういうわけでございます。ちゃんとこういう言葉がございます。盛んに今日はどこにも使われて居ります。そこがやっぱりアメリカ人に書いた物を見せて直してもらいますと、なかなか難しい問題が起こつてまいるわけでございます。

例えば、心の安らぎ、ピース・オブ・マインド。ある外国人が訳したのです。他の人にみせると、そういう言語はないのだといふのです。なるほど、そういうものはないものかと思ひて居りました。ところが、向こうのパンフレットを見たら、パンフレットの表にピース・オブ・マインドと書いてあります。つまり、我々の言う心の安らぎの意味であります。だからどうもアメリカ人といふのは、大変な人間だといふふうにごやはり思ふわけでございます。こんなことをやっているとだんだんわかつてくるわけでございます。いずれにしても、訳せばこういうふうにご訳して居るわけでございます。やはり、集団概念、国民性は集団概念です。個人個人に必ずしも当てはまるものではない。なぜ集団概念がそれで

はそんなに大事なのか、どんな働きを持つかということが大きなポイントです。

人間というのはどんなものでも基底構造がありまして、本音、素朴な感情、喜怒哀楽、快、不快、こういうものが基底構造になります。その上に、いわゆる国民性的表現、物の見方、考え方、感じ方、これはばらばらなものです。それから社会的な意見になりますと、これはばらばらであります。個人的にみると、こうしたものはばらばらでございます。インディビジュアル・レスポンスパターン。一般的社会的意見はそれが集団的に表現されますと、表層的意見としては世論になります。世論が形成されます。世論なんていうものは大したものではない、個人でみんな違う。ところが、これはやっぱり世論の最たるものは選挙でございます。選挙によって政治体制が変わるだけでございますから、集団概念というのはこわいのではないかと。つまり、世論によって変わるわけです。

今度は、国民性の方は、国民性に関する意識のつみあげとしての集団意識、つまり集団意識、これが形成されますと、個人を離れて

一つの文化環境が形成される。文化環境が形成されると、その中の制度、パラダイム、そういうものが起こってくる。それはいろいろな外部刺激を受け手も起こってくる。そういう刺激があるといろいろな制度ができ上がってくる。制度ができ上がると、それによって一番強く影響を受けるのは一般社会意識、その次に中間になると国民性になる。一番弱いのは基底構造でございます。これがまた影響を受けて積み上がってまたこういうふうな動きになる。ですから、各国の特徴を見るには、やはり集団意識を見る必要があるだろうと思います。個人を見るとばらばらになってしまう。しかしながら、集団意識というものはそうはならない。その集団意識に左右されていろいろなものが生まれてきます。いわゆる文明、カルチュラル・クライメイトが生ずる。これに人は影響を受ける。そういう特性があるのです。我々は、ここを明らかにする。そのために統計的なものを使う。個人はわかりません。個人はばらばらでございます。個人を通して集団の意識構造を探索するというわけでございます。

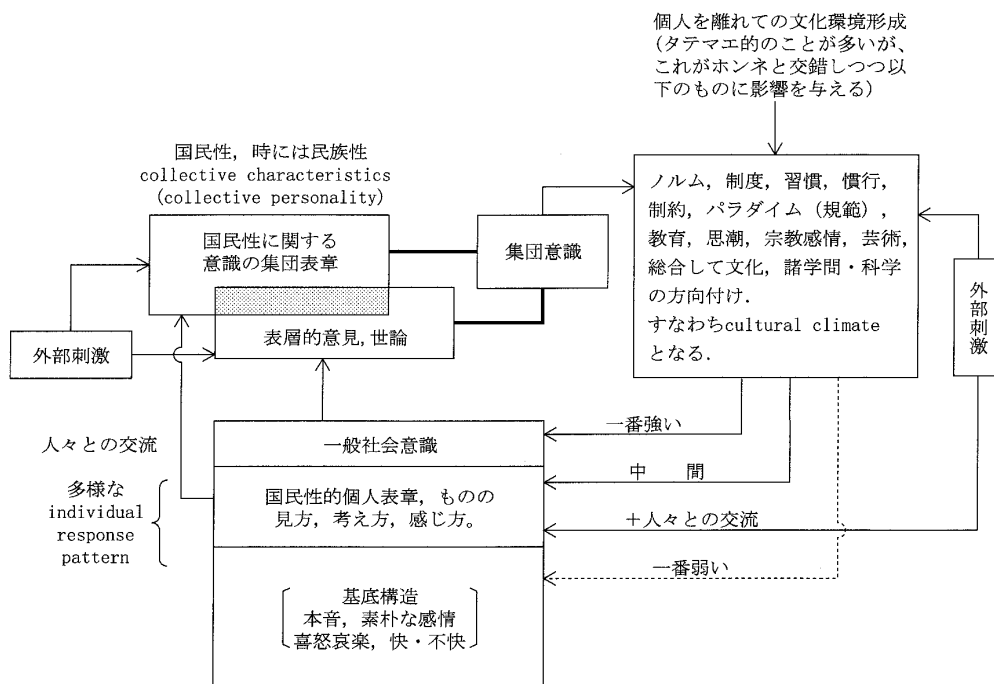


図1 国民性とその機能

そこで、データの科学という問題が起こってくるわけでごさいます。こういうふうなことに有効なのはデータの科学であります、これは何だろう。統計学、データ解析、データに関する諸方法の統合概念です。そういうふうなのがデータの科学、これはある意味の新しい概念でごさいます。なぜそういうことが必要になったかとかそういうわけでごさいます、統計学、集団を知るには統計学というのは非常に大事であるということで、統計学が起こってきたわけでごさいます。これで非常に明らかになってきたのであります、学問というものは発達してきますと、だんだんいい面と悪い面が起こってきます。形式化してくるのです。極めて数学化して厳密化してくる。そうすると、現実と離れた方向に問題がだんだん動いてきています。そこで生命力を失います。それはいけないというのでデータを土台とする、データ解析という学問が別のところから起こってまいりました。つまり、統計学の弱いところから起こってきたわけでごさいます。統計学の中心は現在、推定論、検定論。推定論、検定論ができる範囲は極めて少ない。多くの方が使っておられますが、あれはでたらめでごさいます。何のことかわからないというようなことをやっておりました。まさに形式化したものでごさいます。

そんなものでは情報は酌みとれないというので、データ解析という一つの分野が育ってきました。これがだんだん発達して役に立ってきた。そのうちこれをみんなで押し上げなければならないと同時に、いわゆるマイコンが盛んになってきました。ソフトができました。さあ、データ解析というのはこのごろ何をやっているかと、ソフトづくりではないか。ソフトばかりつくって本当のことはわからなくなってしまう。またこれもだめになってまいりました。そうすると、こんなことをやっていたのではとてもだめだということになります。何が足りないか考えることに

なります。それを改めて考え直す、統合する概念をつくる必要があるのではないかと、そういうことになるわけでごさいます。

これには、さまざまなものごさいます。分類なんていうのもその一つです。昔の分類学ではなくて、今日の分類は違った形の分類でごさいます、そういう分類でいうものが一つ起こってまいります。

そんなふうにして、統合概念、では何のために統合するかと。統合することはデータサイエンスの目的は、現象をデータによって解明する。データサイエンスは、主体的に言えば実際の現象をデータによって理解することです。その目的のために全ての考え方や方法を結集してくるわけなのです。そして、それには三つの定義が当然ごさいます、それが一つの一定の概念のもとに統合化される必要がある、統計的になるわけでごさいます。

データはどういうふうにして計画して、どういうふうにデータを集めるか。どうしてデータに基づいて分析をするかという当たり前のことなのです。ところが、データ解析の人がやるのをみると、どんなデータでも構わないこれを分析するのです。何かデータがあるのではないかと探すのです。データの性格、もとをおろそかにするわけです。それでは現象はわからない。ですから、コンピューターのソフトがあり、数字の羅列があればデータ解析ができる、そういうのが現状なのです。それでは、これは全然何のことはわからない。つまりデータの性質というのはこういうものに依存しているわけで、データを集めるというのはばかにならない。集めるということにいろいろな誤差と特性が入ってくるわけです。それで、計画ばかりではちょっとむりだと思えます。データの計画・収集、こうした性格のデータができます。その上に立って初めて解析が意味を持つ。一体になっていなければならないわけでごさいます。本当は統計学はこうであるべきであった。ところがその

一部分だけがおかしく変化したというのが現実の姿でございます。

さて、現象理解には、データサイエンスの戦略が必要です。そういたしますと、まずいろいろなデータが出てきた、まさにばらばらであります。何かよく見えない。見えないためにそれを分類しあるいは多次元データ分析、その他の方法によって単純化をします。単純化をすると構造が発見されると、概念化が行われます。これでわかったと思ったら大間違い、それは平均値なんです。つまり、平均値というものは一つの見通しのいい道具ですから、それですべて覆うわけではございません。

例えば、医学。医学というのは平均値です。医学はわかったって治療ができるわけではございません。治療というのは人によってさまざま、まさにさまざまでございます。医学というのはあくまでも平均値、学問というのは、サイエンスというのは大体平均値、ここに当てはまるときにはそれはまた多少のずれが起こる。ですから、非常に複雑な現象を扱うときにここで終わってはだめだと思います。また、分類構造や平均値からのこの要素のずれを見出し、考察することから再び多様化の現象が現われてくる。

わかったと思ったらわからなくなった。また、その多様化の現象から、構造を発見する。これがデータ科学の領域です。多様化して他のものが見える、このようなプロセスをたどる。したがって、一つの問題が解けたと思ったらまた新しい問題が生まれてくる、それをまた解いていこうとするという形でございます。ですから、前の実験調査が行われれば、足りなければ本当にまた新しい調査がぐわっとくるわけで、ですから、研究のプロセスによって物を理解しようとする、こういう感じですか。つまり多様化とそれから概念化、単純化のダイミックスというものがデータサイエンスの一つの戦略であると、こういうふ

うにいうわけでございます。

そして、いつももとから出発しましてまたもとに戻ってまた出発するわけでございます。だんだん上昇、らせん的に研究が進む、その途中において情報が獲得される。客観的にいえば情報発信ということになるわけですが、主観的に見れば情報の獲得ということになる。一つわかり、一つわからなくなりしながらだんだん物の深くに入っていく、こういう形が一つのデータ科学のフィロソフィー・ストラテジーです。

すべてを通しまして、データによって現象を理解するという一つの目的に向かって、すべてのものがそこに統合されてくるという考え方があります。

こういう考え方でいろいろな問題を進めて解き明かしていこうではないかと、こういうことが問題になるわけでございます。

それにどういうものがあるかということとはちょっとここでは略しておきまして、データの科学は複雑な物を探索するとこういうものが最も得意とすることになります。

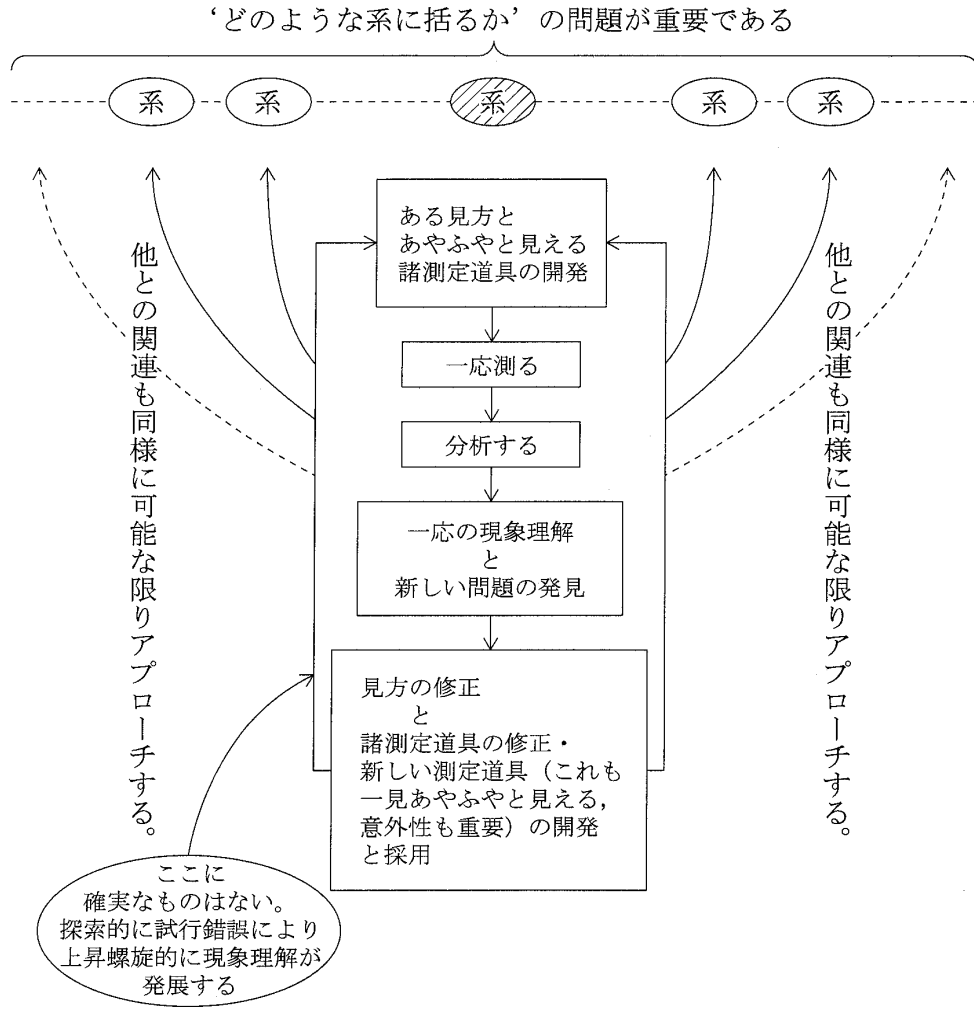
あいまいで複雑なものに対して総合的な探索に関する科学的方法論、データで現象を理解することを目指す一つの方法論で、例えばここで話しします文明の変容、国民性、民族性の問題、地球環境問題の取り扱い、こういうのはこういう形で進んでいきます。

こういう複雑な問題を扱うにはどうしてもそういう研究の態度をとらざるを得ないわけでございます。これに適しているということが出ております。

あいまいや複雑系というのには分解するといろいろ系がございます。たくさん、どのような系にくるかが一つの大きな問題、複雑な問題がありますと、いろいろな系に括り、分解する、これはいいのです。社会情報学も同じものでございまして、どういうふうにかかるとかという問題が最初です。次に、諸道具の道具を開発、ここで一応はかる、分析する、一

応の現象理解と新しい問題発見をする。いかなる修正と諸道具の修正，新しい測定道具の開発，それからまた測り直してもとに戻ると

いうことを考え，そのときに，他の系との関係も出来得る限りアプローチする。



環境問題では十の収支も明快ではない。多面的探索的アプローチにより危険（リスク）の分散等というデータに基く科学方法論の展開。このための諸方法の研究。

図2 あいまいさに満ちた複雑系

この中に画一したものはない。試行錯誤により上昇らせん的に現象が発展する。一応分けてみて，それでやってみる。悪ければまたこの組み直しをすればよろしいわけで，いつもそういう考えで研究を進めていくというふうなものが複雑なもの扱いです。非常に難しいですね。環境の問題は，例えば古紙を回収する。本当にプラスだろうか。環境に優し

いだろうか。なかなかそうはいかないわけで，古紙を回収した，さあ，それをもとに再生するにはどうしたらいいか，そんな簡単なものではないです。回収するまでにはいろいろなプロセスがある。水を使う，薬を使う，電気を使う，その汚染物をどうするかですね。古紙からいい紙をつくらうとすれば，グレード上の紙をつくらうとすればするほど何とい

いますか、汚染が進行するわけです。

例えば、コンピューターの紙がここにありますが、これをコンピューターの紙として再生しないで、もっと下のグレードの紙にする、これは可能です。そうしたときには汚染は少ないかもしれない。これをコンピューターの紙に使用するためには、ただどの紙でもいいわけではございません。厚さや強度や何かが非常に厳密になりますから、またそれだけのものがあるわけです。そういう意味では、収支決算、本当の意味では解っているだろうか。非常に困難でございますね。こういう問題がよく起こり得るわけです。この場合仮定をしっかりと承知してそれを計算してあやふやながら一応の結論が出る。これを多面的にやるわけです。出ればどうするかというと、多面的探索的アプローチよりリスクの分散を考える、科学の方法論を使ってやってみます。リスクを分散、一つに固めない。これがいいからといってそれに100%飛びついたらまた失敗になり、一応の環境悪化がおこってくる。

例えば、こんな例がいいかどうかできませんが、ビタミンEをたくさん食べれば、がんの予防になると。アメリカは大騒ぎしたと。みんないきいきした。今度はEが余計食べるとがんになると、そういう実験が出てきたのです。なるほどそのとおりでございます。危険を分散する。EもほどほどにCもほどほどに、ベータカロチンもほどほどにというのが危険の分散。そういう発想というものはこういう複雑なものにアプローチでは必ず出てくる。

つまり、そこで単純に最適化を行ってはいけないということです。そういう考えが複雑なものへのアプローチのデータの機能というものです。ですから、こういうふうにやりながら、危険の分散というのはどういうふうにしたらいいのだろうかというふうな方法論を考えるわけでございます。

いわゆるミニマックスの一つの考え方とい

いますが、その他いろいろな方法がやはり考えられる。こういうふうなことが一つのアプローチが進むというのがデータサイエンスでございます。このぐらいのところ。二足のわらじの方に一方のわらじを脱ぎます。いよいよ本題に入るわけでございます。

30分くらいたちましたけれども、そこで、先ほどのデータ解析の方法というものを我々は考えていきます。

さて、我々の調査というものは、ある立場から出発いたしました。全国調査で、サンプルがしっかりしなければ何もならない、比較も何もできない。全国調査、サンプルスポットは200から300、サンプルサイズは大体2,000から4,000、ランダムサンプル、1対1面接を1953年から始めまして、ちょうど93年まで終わりました。来年第10回目、45年になります。2003年に50周年記念でございます。そこまではどうしてもやらなければならないのではないかと考えています。あと7、8年ですから頑張れば50年の変化というものにとらえられるのです。こう続けてみると、続けるということは極めて容易であると思えますが、続けることほど難しいものはないわけでございます。人間というのは、いろいろやってみますと、不具合が目についてくる。つまりこんな質問文をどうして作ったのだろうと思うのです。もう変えてしまおうではないかとなります。変えたらだめです。ゼロです。変えない。それは難しいことです。研究者としてこんな難しいことはない。10年一日のごとく守るといふ、これほど難しいことはない。10年一日といふのは極めて大事でございます。そうしてみることによって、質問の内容の変化がどういうふうに変化をしたかを読み取る。質問の意味の変化を読み取らなければいけない。これが大事です。こういう質問は昔はこういうふうにして作っていただけけれども、現在はこういうふうな意味になってきたということ客観的につかまえる

必要がある。つまり、質問票の質問文の履歴書ができるわけでございます。質問の履歴書というのはとても大事なんです。新しい質問を、あなたは賛成ですか反対ですかとぼんとやって、それが何を意味するかと、全然かわってこない。賛成が多いから賛成が多い、それだけではその意味はわかりません。そんな簡単なものではない。そのとき賛成と言っていたのはこういう意味なんだということを長く使っているとわかってくるわけでございます。そういうふうなことを頭に置きまして、やってきているわけでございます。

それで、時系列データをとりますと、変化するものと変化しないものがある、それをはっきりすると同時に、どういうふうに変化する姿がわかるか、こういうことがポイントになるわけでございます。

つまり、続けることによって、こういうことがわかります。それでだんだん続けておきますと、おもしろいのです。世の中の変化が、こういうマクロ形態より早くあらわれるものはない。それがわかってきます。

日本の節目というのは、大体15年ごとに大きな変化にぶつかることが解ってきました。一番大きく変化が見つかりましたのは、1978年、昭和53年、そのときです。世の中の方向はそれまでの方向とは違う方向に向いてきた。それまではいわゆる近代化志向に向いていたのに、この方向が逆になってきた。正にUターンがおこってきた。多くの方は近代化がますます進む、そう言っていた。評論家というものはそういうものです。どんどん近代化志向が進むと思っていた。ところが、商売人というのはいすごいすね。そう思いました。ある種の出版業をやっている人なんすね、その社長が言うのには、どうも世の中変に動いてきている。おれにはわからないけれども、何か大きく動いているような気がする、そう言っていました。それで、我々もそうかなと思っていました。それで、昭和53年、1978

年に調査をやりました。やったときに、初め集計表を見たときに飛び上がりました。すべての集計表が逆さまではないかと思ったのです。がらっとひっくり返った。今までの方向がみんなUターンです。何かコーディングが間違っただのではないかと全部見直しました。間違っていない。これは果たせるかな、その猛烈な変化があるということがわかりました。

と同時に、詳しく分析すると、日本の若者において、いわゆる近代化志向が崩れてきている。20歳の前半だけです。あとは変わっていません。20歳の前半にすべて近代化志向が崩れてしまう、そういう発想がなくなってきたということがわかりました。それでわかったということです。それでそのつもりで分析すると、確かに全部そうなんです。その出版社の主人は大変なものです。そういう事実が出たのは昭和54年でございます。朝日ジャーナルに出たのです。朝日ジャーナルに書いたわけです。それが出て、みんなは正にそう感じたのでしょ。それからいわゆる若者の保守化、伝統回帰、そういうのが言論界を覆ってしまったのです。調査には出ていた。よく詳しく見ると、昭和50年くらいから起きているのです。48年にその兆候があり、48年に気がつけばよかった。我々の目がやはり節穴だったということでございます。48年くらいから徐々に起こっています。一部分でしたが、50年、52・53年から決定的に顕在化しています。ですから、こういう調査のマクロデータというのはばかにならないものだという事です。非常に大きな変化というものをキャッチしているわけです。やっぱり継続調査の、つまり変化の方向が変わっていることが如実に出ていたわけです。

それでは、今度は国際比較化、国際比較とはどういうことを考える必要があるのか。つまり国際比較という問題を考えたときに、我々としては1971年のときに、日本の国内は

大体近代化志向が続いておりました。だんだんわかってきた感じになりました。つまらなく思ったわけでございます。そこで、ブラジルの日系人を調べようと思いました。ブラジルの日系人を調べようと思ひまして、外から日本人を見てみようと思ひました。それを通して日本人の国民性を探ろうとしたのです。ブラジルの日系人というのは1世がまだ当然おりますからそれを含んだ2・3世も調べればわかるだろうということで考えました。当時の海外学術調査、予算をもらいました。さて、そこで調査をやれると思ったわけでございます。在日ブラジル大使館へ行ったり、外務省におねがいしました。ビザを請求したがビザがいつまでたってもおこない。これにはびっくり仰天しまして、どうしておらないのか。それで、現地のブラジルの人に、向こうの外務省に行ってもらいました。そうしましたら、日本政府がなぜ日系ブラジル人に興味を示すかわからない。ビザは出さない。なるほど考えてみればそのとおりですね。つまり、日本政府の金をもらいましたから、日本政府の金で日本人がブラジル日系人を調べることは不可能だと解りました。なるほど考えてみればそのとおりです。財団から出た金はいいです。なかなか大変なものだと解りました。さあ、お金はおいた、できない。仕方がないからハワイでやろうでないかと。ハワイの日系人をやりました。

というような、最初ハワイの日系人は相当日本人でないと思っておりました。それでハワイの日系人を調査いたしました。ハワイの日系人を調査すると余り変わらないのです。単純集計は、10%ぐらい前後しか違いません。日本の県民性という調査がございます。県民性を調べるといのは、独自でNHKが2回やっています。それを見ると、どんな質問を出しても大体10%か15%ぐらい違います。なかなか特徴は調査ではつかめません。ハワイと同じではないかと。ハワイの日系人という

のは日本人と同じではないかとなります。しかし、どうみても同じとは思えない、会ってみれば、アメリカ人とかわらない。なぜ違うのだろうかということで、それでだんだん調査もデータを分析をして、これはあとでいろいろなことが出てまいりますので、お話ししますが、いわゆる先ほどお話をした数量化で分析しました。そうしてみたら、考えの筋道というものが存在することがわかった。つまり、日本人から見たときに、先ほど近代化というお話が出ていましたけれども、それまでの日本人は物を見るときに、必ず近代と伝統を分けてものをみていました。それで近代化を志向する、そういうふうな発想が日本人にあったわけです。我々も知らずにいたわけです。

質問も、いわゆるそれに向けた質問が非常に多く存在した。ですから、やってみると、日本人は、近代と伝統の軸で考え近代化を志向する。必ずどの質問でも新しい、古いという仕分けをする考えの筋道が日本に存在する。ハワイの日系人には存在しないということ、そういうものはない。だから違う。

つまり、言うことが違ってくるのです。例えば我々が話をしますね、そうすると、新しいことを言うものですから、こういうことでも新しいことを言うと予想することになります。実際はそうでない答えが返ってくる。だから理解できない。それでは、新しいことばかり言うから人間関係はどうかとなると、古い人間関係が残っているのです。ハワイの人間関係は古いということがわかりました。

日本人で言えば、近代的な人は人間関係も合理的です。ところがハワイはそうでない。そこでわかったのです。そういう我々の考え方と違っていているということは、つまり考えの筋道が違う。それを理解しなければいけないということでだんだん調べてみますと、これは後でお話をしますが、ハワイの日系人は近代、伝統の考え方はないけれども、いわゆる

人間関係は非常に日本人に近いということがわかりました。それで考えの筋道というのは非常に大事なんだということが日系人調査でわかりました。そこで、比較ということはそこをもとにしなければいけないのではないかと考えられます。我々は単純な発想で比較しようとしてもだめなんだということがわかりました。それからだんだん国際比較の話になる。

そこで、いかにして比較可能性を見い出さるか、これはポイントであります。比較可能性のないものに比較してもしょうがない。比較可能性はどういうところで生み出せるかと。それはサンプル。サンプルは全国調査（ランダムサンプル・あるいは信頼性の検討できるクォータ・サンプル）できなければだめなのです。それから、質問の選択と調査票の構成、それから翻訳、これはくせものでございます。翻訳というのは、これほど翻訳というものが深刻な意味を持つということがわからなかったのでございますが、実際に国際比較と翻訳とはただ事でないということが解りました。日本語のクエションがございまして、それを英語に翻訳します。それをまた日本語に訳します。日本語を比べてみたらどうなるか。なかなか合わないのですね。合わないのです。驚く程合う質問もございまして、今度はもとは英語、それを日本語に訳します。それまた英語に訳します。我々が訳するわけではありませぬよ、プロです。プロ中のプロです。我々何も英語なんかできませんから、それを見て理解する。そうすると違うのですね。どういう問題で違うかと、そこを考える。翻訳というのはなかなかおもしろいことございまして、比較的英語は翻訳がそれほどの誤訳がない。その次はフランス語、ドイツ語が一番誤訳が多い。日本のこと、ドイツ語のレベルが低いからではないような気がしてきたのです。言語の言葉の性格ではないだろうかと思うのです。ドイツ語というのは、御承知のよ

うにいろいろな言葉をくっつけてできますから、極めて合成的な言語だと僕は思うのです。あれ、それ、これ式のことが多いのではないかと思います。

例えば、一番滑稽なのは、あなたは先祖を尊びますかというのです。その翻訳を見ました。ドイツ語で、それを外大の助教授に翻訳してもらいました。そうすると、ドイツ語に訳すると、あなたは、先行者優先を尊びますかと訳した。前に行くものです。先祖だから。前に行くもの、前に行くものを尊びますかといったら先祖も前に行ったし、先行者も、字引を見ますと両方の言葉が合っています。間違いだろうかということ、文脈からいっておかしいのです。文脈はおかしいけれども、そこは考えなくてはいけない、ドイツ語はそういうふうな一つの約束するシチュエーションの中の言語であるということのような気がします。誤訳と言えるかどうかわかりません。両方字引にある限り間違いはない。

それから、離婚はいかなるときに許されるかと、こういう質問でございまして。それは、ブレッヘン・ディー・エーエと書いてあるのです。それをその先生が訳した。あなたは姦通は許されると思いますかと訳し飛び上がるように驚いた。字引を見ました。姦通という言葉がございまして。これは同じ言葉です。一方は結婚を破るということです。翻訳というものはそうしたものであることがわかりました。誤訳とは、非常に怖いのです。同じことを言っているかどうかわからない。そういうことで、非常にこれに力を使わなければいけない。どういう問題で比較可能性が保てるかと。それからいろいろな国でも似たところと違ったところがあうということを理解しなければならない。全く違ったものは存在していない。どこが違いどこが同じかということです。言ったことを外国人に理解できるようにする努力と説得性ある方法を用います。つまり、彼らに通じるロジックで語ることです。これ

はサイエンスであることが一番良い。こうしないと比較はできない。

ですから、例えばイギリス国民性をアメリカ人がアメリカの発想で文学的に表現してもそれは外国には理解できません。その言葉自身の持っている方自身がアメリカ的だからです。それはいけない。共通のロジックで理解できるようなものにしようとしたわけです。これが一つの我々の言う国際比較の一つの方法論でございます。そんなふうにして国民性の問題を組み上げていこうではないかということになっています。

それで、我々はカルチュラル・リンク・アナリシス (Cultural Link Analysis CLA) というものを考えました。調査対象として日本人、アメリカ人、日本人とアメリカ人、幾ら比較しても月とスッポンかもしれない。相手を理解させることができない。そこで、その間にハワイの日系人を入れました。ハワイ生まれの非日系人、アメリカ本土生まれの日系人、アメリカ人、少しずつ似たところと違ったところがずれてまいりますね。どこが似てどこが違うかということ、こういうふうにつないでみますとだんだんアメリカ人と日本人がつながる、アメリカの次につながるのにはカナダの英語、カナダのフランス語、それからイギリス、フランスと、こうつないでいきます。こっちからこちらはなかなか難しいです。そういうふうにして、地域的には似たところをつなぎ合わせて理解しようとする。質問文もそうしなければならない。つまり、Aに固有の質問、Bに固有の質問、日本人がつくればどうしても日本人、アメリカ人がつくった質問はどうしてもアメリカ人、わかったと思っても本当はわかっていないということであります。と同時に、近代産業社会に共通な質問、モラルなんてどこの国だって同じです。勤労意欲就職の条件、科学に対してポジティブ・ネガティブのようなものでございまして、喜怒哀楽、快、不快、それはアメリカ人だっ

て快、不快は快、不快。うれしいときは喜ぶのです。それはベーシックなものでございます。

基底構造はそう難しくないし、近代化というような問題は非常に表面的なことはそう難しくはない。中位の国民性のところがなかなか難しい、そこを合わせてつくる、そういうような質問の作り方をしています。

例えば、このごろ我々の質問でいいますと、金か仕事かという質問がよくございます。これをですね、フランスに持っていくとこの質問は成り立たないのです。それは金か余暇かという質問が成り立つのは日本、アメリカ、イギリス、それからドイツ、日本とドイツこれアメリカに占領されていますから、アメリカかぶれしていますから通用する。フランスとイタリーはだめです。質問が違うのです。欲しいものが買えるだけの金、もう一つは、自由にできる時間、そういう対にしないとクエションにならない。そういうことはないです。あの発想自身がアメリカ的なんですね。金が世の中という、そういうようなことがございますから、こういうような冷たい質問になる。

それから、今度はそれを時系列でつなぎます。時系列というのをやはりいろいろな国でみていきます。時系列のときには似たところがあるし違ったところもあるわけでございます。世界各国ネットワークで固めるわけでございます。時間的なネットワークを固めなければいけないわけですから。大変な仕事になって、1人ではとてもできる仕事ではございません。そういうふうな仕組みで考えるのです。それをリンクさせるというのでCLAとなります。

一つは、リンクは、対象はスペイシャルリンク、国の間で、場所がリンクです。アイテム・ストラクチャー・リンク、つまり、質問文のリンク、テンポラル・リンク、時系列のリンク、こういうふうな文化的なリンケー

ジという形で比較可能性を求めて調査を組んでまいりました。それが我々の調査でございます。

そして、今までやってまいりました。海外の調査、71年にハワイの日系人さっきお話したものです。それから今度はやっぱり日系人だけではだめだとなり、ハワイでは全体をやるのではないかということで、ホノルルの住民をやりました。78年、83年、88年までやりました。アメリカ本土の調査は、78年と88年にやりました。それから、87年にイギリスとドイツ、まだ西ドイツですね、当時は、とフランスをやりました。これは全部、全国的調

査です。それからイタリーを92年にやりました。日系人のブラジルを、これは財団から資金を得てついにブラジルへ行きました。ブラジルの日系人。それからオランダをやりました。そこまでが現状でございます。

なかなか金がかかるものですから、そうそう研究費もらえませんが、一度もらうとえらいめに、相当な金になってしまうものですから、億単位の金のものでございますから、そうそうまた出したかと言われるわけですから、ちょっと間を置かないとできないわけでございます。そのリンケージをここに載せてございます。

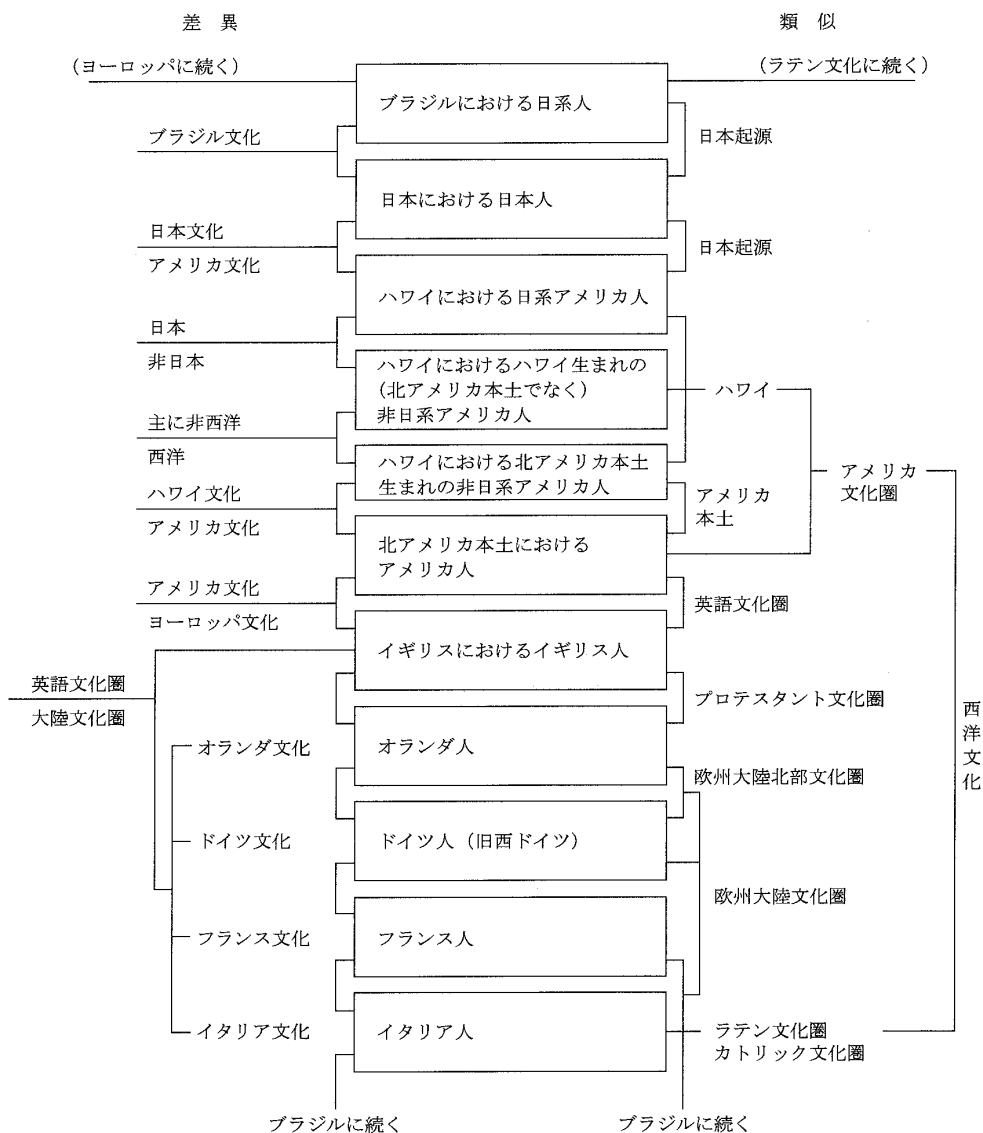


図3 国際比較の連鎖 (CLA)

ブラジルの日系人，日本における日本人，ハワイにおける日系アメリカ人，さっきのアメリカ人からイギリス，カナダはまだできておりません。オランダ，ドイツ，フランス，イタリー，こういう形でリンクをしました。どういうところが違っているか，どういうところが似ているかということでリンクをつけました。こういうことをいたしまして，変わっているところと変わっていないところ，これは時系列調査でわかります。特殊なところと普遍的なもの，これは国際比較調査でわかります。

こういうふうなことが積み重なってまいります。積み重なってまいると，まさにデータライブラリーが必要でございまして，例えばアクセスできればいろいろな研究を行うことでできてくるというような段階になっておるわけでございます。

そんなことをやってきました。まず，継続調査から見た日本人の国民性，こういう問題が出てございます。それから，そのときに大多数の意見としての国民性ということになると，人間関係の建前，面倒を見る課長，つまりどんな課長に使われたいかと，こういう質問になりますと，規則を曲げてまで無理な仕事をさせないけれども，仕事以外のことでは面倒見ない課長より規則を曲げてまで無理な仕事をさせることはあるけれども，仕事以外に人の面倒を見る，面倒を見る課長が80%台で好まれ，これは本当に40年間全く変わりございません。大多数意見というのは全体でほぼ3分の2以上，70%以上です。それから男でも女でも，若いのも年寄りでも，学歴の高いのも低いのも70%以上，それは大多数意見となります。まんべんなく広がっていることです。それから宗教的感情，これは宗教を信じる人は日本は少ないです。ところが宗教的な心は大切にす。宗教を信じないけれども，宗教的な心を大切に思う，これは日本人の特徴。あわせますと大多数の意見。そ

れから人間関係が温かい方。この他おもしろいのは，先ほど言いました近代と伝統を対比する考え方，これがあとディスカッションかなんかあればお話をいたしますが，今日では昭和53年に始まりましたこの考え方の崩壊が，昭和53年に，二十代の前半に始まりました。今日ではどこまで残っているのかと，54歳までは崩れました。それ以上は昔のまま対比する考え方が残っている。つまり，まず若い所で崩れ，徐々に上の年齢に這い上って崩れていくのです。若者から起こって若者の影響が上に及んでくる，それと同時に年代が高年齢化してきますから全体が崩れる。つまりそれだけソーシャル・クライメイトが変わってきたということです。近代，伝統のソーシャル・クライメイトが変わってきたから上の方の年代も変わってくるのでしょ。ソーシャル・クライメイトの変化というものを一番早くキャッチするのは若者，それが出てまいります。今日では55歳以下は崩れている。ところが，はっきり言えば60以上は昔のとおりで，近代，伝統，やはり分けて考える。

日本の指導者階級層は大体60以上でございまして，近代，伝統，まだそんなことを考えているのだと思います。それでずれてきています。そういう問題がわかってきます。

それから，自信と自虐思想，自信がだんだんついてきた。時間的に変化したわけですが，変化，自虐思想がございまして，それと自分が悪いと思う。これはデータにはっきり出てくるわけがございまして，何でも悪い面を見るのです。例えば，あなたは一口に言って人間を信頼できますか，それとも用心してきた方がいいと思いますか？ 余り信頼できないぞと実はそう答えてます。ところが頭の方に，世の中には信頼できる人もできない人もあります。あなたの周りを見たときにつけますと，信頼感ばあっと20%ぐらい上がるのです。何だというわけです。つまり，それだけの問題が頭にあると，おれの周り見た

ときに、あいつは信頼できるなど、一般的に聞くと信頼できないものだと、そういう質問が幾つかやってみると出てまいります。

それから、例えばこういうことですね。アメリカ文化のいいところ、アメリカのいいところ、アメリカ人に聞きますと非常に多くあげます、日本人に日本のいいところというと余り挙げません。アメリカ人はアメリカの悪いところは余り挙げません。日本人に日本の悪いところをあげさせると多く出てくる。悪いことが好きなんです。大好きなんです。新聞をごらんになると、日本の悪いところばかり書いてありますから大変だなと思います。これは重大なる一つの特徴でございます。調査では、そういうことが出てくるのです。

国際比較において各国及び日系人の大局的位置付け、つまり取り上げた各グループの回答パターンを土台として、どのグループがどのグループと近いか、遠いかという関連性を示す構図を知ることは、より進んだ分析に入るとき、大局を見失わないために極めて重要なことです。そこで7カ国調査とハワイ・ブラジルの日系人調査に共通する質問を取り上げ、各国、日系人グループの意見分布を用いてマクロ的な立場から分析を進めてみました。

国際比較のための質問項目は、CLAの考え方により、それぞれの国に特有な考え方を引き出す質問、各国間で共通の質問（人間として共通のもの、および近代文明社会という面で共通の考え方）から成っており、日本人の国民性調査に継続して使われてきたものも含み、内容は、経済の見通し、将来の見通し、不安感、健康観、勤労観、家庭観、人間関係、義理人情、信頼感、科学文明観、宗教、政治意識など様々な領域にわたっています。この分析にはこれらほとんど全ての質問についての意見分布を用いていますが、ただ、文化発展の状況に強く影響される環境とコンピュータに関する質問を除外しました。また、各質

問において原則として一つの回答肢をその質問の特徴をあらわすものとして取り上げ、その他・DK・中間的回答——は除外しました。各質問がいくつかの同じジャンルの小質問にわかれていて回答選択肢の形式が同じ（段階の意味を持つ回答肢など）ものについては、それらを合計して平均値を出し、一つの質問に対する回答として取り扱いました。さらに、後述する義理人情スケール、人情スケール(warmheartedness scale, 暖かさのスケール)、中間回答スケールにまとめたものもそれぞれ段階で区分して回答肢と同様に扱い、この分析に含めることにしました。

各質問のニックネームと取り上げる回答肢は表の通りです。

この国別の回答分布表（国数×総回答肢数のパーセント表）を用いて、数量化Ⅲ類、このヴァリエーションの相関表の数量化——これは国と回答カテゴリの間の相関関係を最大にする数量化と等価になる——を行いました。

このほか次のような方法を用いることも理解しやすい。同様な図柄が得られるのです。

$$d_{ij} = \frac{1}{K} \sum_{k=1}^K |P_{ik} - P_{jk}| \text{ を考える.}$$

ここに i, j は国あるいは民族、グループ k はある質問のある回答肢、あるいは「あるスケール値を持つこと」を示します。

P_{ik} は i 国(民族、グループ)が k において示す比率

d_{ij} は i と j との差の程度をあらわす fuzzy measure

そこで d_{ij} → 関連性を表現する図柄を求め

↑

MDA-OR

ることになります。

表1 質問ととりあげる回答肢——国別比率——

記号	質問番号とニックネーム	回 答 肢	ド イ ツ 人	イ タ リ ア 人	フ ラ ン ス 人	ブ ラ ジ ル 人	日 本 人	ハ ワ イ 系 人	ア メ リ カ 人	イ ギ リ ス 人	オ ラ ン ダ 人
◆A	金志向										
	18 一生働くか	1 ずっと働く	39.4	56.3	55.2	83.3	64.1	49.4	57.8	55.7	52.4
	19 お金と仕事	1 仕事がなければつまらない	39.8	65.3	51.0	88.0	72.8	61.1	64.6	54.4	60.1
	20 就職選択の条件	1 給料	12.9	20.5	16.7	16.3	19.8	14.4	20.9	16.5	11.6
	22 暮らし方	1 金持ち	2.8	9.1	8.1	8.0	13.8	9.4	6.1	7.3	3.9
	33 子供に金は大切と教えるか	1 賛成	26.2	24.3	40.9	23.1	47.8	20.6	16.6	21.1	15.4
	8 国家目標	1 秩序	38.1	39.9	35.6	38.2	20.6	38.3	29.4	40.4	42.5
	8 国家目標	2 政策決定に人々の発言	29.5	34.2	15.4	28.0	27.1	30.6	33.1	31.4	24.2
8 国家目標	3 物価上昇をくい止める	8.8	15.9	21.5	21.6	35.1	22.2	22.6	14.3	7.9	
8 国家目標	4 言論の自由	18.8	9.0	22.0	5.2	7.5	5.6	10.9	11.0	22.9	
◆B	信頼感										
	51 他人のためか自分のためか	1 他人の役に	42.8	20.7	19.2	40.9	31.2	58.3	53.6	52.9	31.9
	52 スキがあれば利用されるか	1 利用される	29.9	61.1	57.7	57.6	32.3	28.3	40.4	37.5	42.9
53 人は信頼できるか	1 信頼できる	37.8	13.9	22.8	6.1	39.1	60.0	42.4	36.3	47.5	
◆E	不安感										
9-5 (非常に感じる率の平均)			17.7	56.7	41.0	53.3	17.2	32.7	24.8	29.2	10.4
◆F	家庭										
	37 家庭はくつろぐ唯一の場所か	1 そう思う	56.1	73.6	65.4	76.7	80.3	50.6	44.8	50.7	31.6
	38 離婚はすべきでないか	1 すべきでない	9.9	24.8	25.9	42.8	35.4	46.1	45.2	43.1	24.2
	38 離婚はすべきでないか	3 二人の合意でよい	44.7	34.4	37.4	33.5	19.5	13.9	12.2	16.6	42.8
	39 家事や子供の世話	3 男女の区別なく	48.3	48.5	68.6	67.0	28.3	54.4	59.1	51.2	54.1

この結果、国の布置、第1軸×第2軸(1X²X)をみると図のようになり、予想した通りの日本人(J)・アメリカ人(A)・フランス人(F)とイタリア人(I)を頂点とする三局構造の図柄があらわれてきました。但し、アメリカ・フランス間の距離は、それらの国々の日本との距離よりも小さくなっています。そして、日本人、ハワイ日系人(JA)、ブラジル日系人(JB)の関係が日本人、アメリカ人、フランス人の関係の縮図になっているのです。もう少し詳しくみると、アメリカ人に近くイギリス人(E)があり、アメリカ人・イギリス人とイタリア人・フランス人の間にドイツ人(G)が位置する。イギリス人、ドイツ人、オランダ人(D)が小さい三角形(内部に他のものが入らない)をつくっています。

JAはAとJの間にある、JBは(F、I)とJの間にあります。

第一次元をみると、JBと(F、I)が近くにあり、JA、A、E、Dが近く、その対極

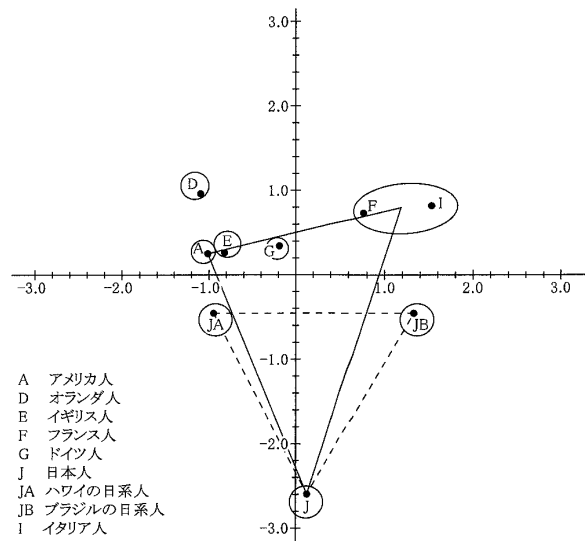


図4 国の布置

にあります。JとGはその間にあり、かなり近いといえるということも注目すべき結果です。第二次元目は下方に日本人、日系人が位置し、上方に西欧人が位置するという明快な結果です。

二次元を総合すると、予想の円環的連鎖が

ここにデータによって描かれたことが解ります。とくに、ブラジル日系人とフランス人・イタリア人というラテン系の人々が連鎖する（リンクする）姿が出てきたのは面白い所でしょう。これは非常に大ざっぱな考え方のございまして、ああいうふうな方法をとって、まず大きな全体の位置付けというものを考えると、国際比較ではこういうふうな問題が表に出てきているということになるわけのございまして。

これは詳しい内容がございません。大づか

みの理解に資するものです。これを土台に詳しく分け入ることになります。データ科学というような方法で国民性研究をこういう形でやるのだというところに、イントロダクションで終わってしまったと思いますが、ディスカッションの中で、あとではもう少し国際比較、立ち上がったことがあればということであればお話を進めたいと思います。

一応1時間たちました。あとはディスカッションでお話し合いと思います。

林講演に対するコメントと質疑

司会(金)：ただいまのご講演についてご討論を始めます。何十年間の研究結果を1時間でまとめるのはかなり難しいことではありますが非常にわかりやすいご講演でした。質問も含めて活発なご討論をお願いいたします。

狩野：質問という的確な形を成していないので大変恐縮ですけれども、子供のときに、私のところへ時々来る白系ロシア人がございまして、その白系ロシア人はいろいろお菓子などをつくってきて御馳走してくれるので、私としては大変歓迎すべきおじさんだったわけでした。専門学校か何かのロシア語の先生でいたようでした。それが、あるときに、来るなり私を抱き上げて、そしてニコライが死んだとあって、それこそ嗚咽ではなくて大声を出して泣くのです。それはかなりの子供がソビエトの官憲に捕まって殺害されたという風評があって、耳を切り取って彼らのもとに送ってきた。そのときは何か牡牛のように泣くという状態で、私のところに来るのにロバに引かせたそりに乗って来るのですけれど

も、抱きしめて泣きまして、ニコライが死んだニコライが死んだと、日本語でも言いますし、それからまたロシア語でもそう叫ぶのです。彼にしてみれば、私が幼くて子供のように見えるのだらうと思うのですが、それで、大変同情いたしまして、子供なりに何か慰めの言葉を言った。しかし、それは誤報でして、結局は耳はどこか別なもので、ニコライは元気に生きていて、やがて帰ってくるわけです。そうしましたら、全然うれしい素振りはないのですね。そのときに、私も幼い気持ちの中では、このおじさんは悲しみの状態においては、私たちとわかるような形なんだけれども、一たん息子が生き延びたとなったときには、私が見えないところで喜んだかもしれないけれども、しかし、その喜び方は全然違うな、どこか離れた人間だ。私が普通親に期待するような形で、ああ、生きていてよかったというときのあの嬉しさが、必ずしも白系ロシア人の老人にはみえなくて、死んだときに猛烈に悲しむ、その悲しむもののドラマチックな

表現というのは、日本人のそれを何もわからない子供の幼い私に綿々と訴える、そのときは見紛うことなく愛情の表現なんですね。

しかし、何で殺されてはいないで戻ってきたときに、ああそっけないのか、それがいつまでも私には不思議でして、この場合は、日系ロシア人というものの持っているシチュエーションというものもあるかと思えますし、それから殺して耳を送ってくるという一種残虐なソビエト政権という神話が流布していて、その当時で当然の雰囲気だったのですけれども、しかし、そのとき民族が異なるとわかるとところとわからないところがあるという面では、子供としては非常に痛切な感じだったわけです。

今のような共通な悲しみ、彼の悲しんでいるのはよくわかる、しかし、生き延びたということを知ったときに、すべてロシア人の生活を見たわけではないから知らないのですが、それを私に報告したときに、彼はいかにも私から見ればそっけなかった。彼は本当に喜んでいるのかしらということをも不思議に思うような何かであったという感じがあったのです。これは外国人に会ったときに、どこか喜怒哀楽の中でそれを非常に共有するところと共有しかねる表現とその奥にある感じ取り方がどこかに本人の中で分かれているという感じがあります。先生は国民性のちがいをご覧になられて、今のようなことをどのような形で感じになられましたでしょうか。

林：そのとおりで、全く違った人間は余りないと思います。だけれども、同じところと違ったところというのはどうしてもある。そこでおかしいと思ってはぐあいが悪いのです。これは違ったところもある人だと思えば協調できる点があるのではないかというふうに考えるのです。日本人で一番難しいのは、アメリカ人より難しいのは日系人なのです。同じところと違うところが相当あるのです。そこを間違えらうまく行きません。日系人はアメリ

カ人と日本人間で両者が一緒にまざっているのです。こういう点ではこうでということが仕分けできていると理解できるのです。

実は、ハワイで調査をやりましたときに、後でラジオで話ししてくれというので、そういう話をしたのです。早速1世の人が、それは日系人と結婚した人なんです、電話がかかったきた。全くそのとおりで、実際、自分の主人というのは日系人なのだけれども、日本人だかアメリカ人だか全然わからないというのです。違った人種だと思わなければいけないこういう理解で相手がわかったら安心して離婚せずにやっていけるようになりましたという電話をいただいたのですが、やっぱりそういうところがあるのではないのでしょうか。家庭の中にそれが入ってくると大変です。よその人だとそう思って済みますけれども、しょっちゅうそういうことが出たり入ったりすると、これなかなか大変なことではないかという気がいたします。

狩野：私もそのときに感じたのは、ニコライの死をその父は一種慎み深く耐えているのかなと思ったわけです。それで、むしろ最初のが、そのころは、戦争が起こりそうなときでしたから、どちらかといえばそういう劇的な形で悲しみを表現するのは大人としてはややあるまじきあり方のような感じですがけれども、情に流されているという感じが日本的な訓練を受けた子供たちには、感じられるかもしれない。ややお芝居のように見える悲しみ方の劇的なドラマチックな動き方にちょっとこっちはついていけない。だけれども、遺憾の意はあらず。悲しみにも同情するというのを伝えるのが精いっぱい、だから向こうはほおづりして悲しみを訴えますから、どこか大変だという感じがあった。しかし、その後で、極めてそっけなく生きていたということを見たときに、今度は逆にそういうプラスの喜びは、こちらは抑制したのだろうという感じがします。

つまり、父親として、虐殺されないで、結局生きていたという知らせがきてうれしい。しかし、そちらの方が私としては親としては心底うれしい感じがするはずだと思っていましたから、それを抑制しているのは礼儀なのか、そう思ったのですね。悲しみにおいては調子が合った。喜びに対しては全然調子が合わない。ですから、恐らくプラスとマイナスの環境の軸で、片一方には合っているいるけれども片一方には合わないという面が随所にあるのではないかと。

問題は、そのときにこちらが喜んでいるというのはその父親はよくわかるのです。そして、お前はそんなに自分の子供のことを喜んでくれるかという謝意は述べるのです。どこか基本的に違っているということ、見方が違うという感じがありまして、それで私としてはどうも喜びの同調というものはどうも難しいものではないかと、非常に高級なものではないかと思いましたが、つまり、喜びは同調しにくく、悲しみは同調しやすい。そういう感じがいたしました。では傾向として一体どうなんでしょうか。

林：そうですね、そこでの暮らしのあやというのは、やっぱりこれではなかなかわかりにくいと思いますが、お話は非常によく全体的にはわかると思います。

田中(一)：非常に明確な、しかもわかりやすいお話で、よく頭に入ったような気がして、どうもありがとうございます。私はデータ科学について全く存じ上げませんので、大変素人の質問で恐縮なんですけれども、二、三お伺いしたいと思うのです。

これは仮想的なことなんですけれども、別の団体がありまして、その別の団体が、今先生から伺ったような国民性の調査を幾つかの地域で行ったときに、その得られた結果は、最後に示していただきましたこの図ですね、これと同じ図が得られる、そういう意味では客観性があると考えてよろしいですか。

林：よその人、外国人が行えばまた違った面が出てくると思います。余暇開発センターがやった調査があります。それでいきますと、クエションは私どものようなクエションではなく、まさに日本的なクエションを集めたクエションにはなっていますけれども、私どものほど明快ではないが、大局的には似た形が出ます。一方に発展途上国が位置する。他方の上がヨーロッパになります。ちょっと日本の位置がやっぱりあいまいなんです。変なところに入り込んで妙なものと一緒になっています。計算すると、やっぱりそれはクエションのせいではないかと思いますが、大局はやはり、ああいう東は東、西は西という感じは出ると思っております。この意味で客観的です。

田中(一)：この場合、先ほどお話がありましたように、日本人からアメリカ人、あるいはカナダ在住の日系人、やはり幾つかの場合を設定して、調査をするというのが、データ科学としての方法である、そういう風に考えてよろしいのですか。

林：そうです。データ科学の方法でああいうふうなクエションの組み方をし、国のとり方をすると、全体的にあのような形になると思います。一問一問、あるいは細かいところはいろいろ同じであったり違っていたりします。これにはある傾向は勿論あります。つまり、ある質問では一致する、ある質問では離れているという姿が理解できる。そのあり方も分析できる。そこがデータ科学の取り柄でなからうかと思っております。そういう客観的に考えられる材料を提供するという意味はデータサイエンスではないかと思っております。

田中(一)：実は、私も伺ってありまして、設問とかあるいは回答の処理の仕方などにはややもすると、それぞれの価値観がいろいろなところに入り込んでくるので、得られた結果の客観性をどういう形で保証をするかというこ

ころが非常に難しいかなと思って、先生のお話を伺いました。

林：お話のとおりだと思います。そこがポイントでございます。

田中(一)：それで、これは簡単なことなんですけど、国民性ということをお私たちが聞きますと、何か非常に固有なものであって、そういう固有なものを示しているようについ受け取りがちなんですけど、それが先ほどいろいろな調査でこういう風に変化する。私が60歳以上のためにそう思うかも知れませんが、この辺はどういう項目も変化している。そうすると、先ほど伺った結果というのは国民性の調査というよりは、何か生活意識の調査のような気がしたのですけれども。

林：まず、国民性の定義です。いろいろなレベルがあるのだということの一つ、そこもはっきりさせた方がよいわけです。先ほど言いました大多数意見、これは一つの押しなべたような特徴である、それからもう一つは、

変化をしますね。変化をすると、変化の仕方が国によって差があるかどうか。これも一つの特徴ではないかと思えます。

それから、日本人が非常にパーセンテージ高いのですけれども、外国ではそれが高いか低い、あるいは分布が違っているかどうか、それも定義の一つです。レベルはだんだん弱くなります。しまいには、すべての考え方は同じなんだと。だけれども、その間の関連性が少し違うのではないかということも出てきます。これも一つの国民性の表現ではないだろうかというところを捉えているわけですね。ですから、特徴と同時に、特徴でないところも頭に置きながら、特徴と変化の姿を国民性の定義の中に含めたい、それがデータサイエンスの定義の仕方ではないだろうかというつもりで使っております。これはつぎのように表現できます。

表2 さまざまなレベルの国民性の定義

	時間的安定性	他国との比較での特殊性
1. 大多数意見	○ ○ データなし	○ 無関係 ○
2. 意見分布	○ データなし	○ ○
3. 属性別意見分布 たとえば性、年齢、教育程度、職業、居住地、 政治的態度（左、右）など	○ データなし	○ ○
4. 意見の変化のありさま（属性別を含む） 年齢コーホート分析	無関係	○
5. 意見構造	○	無関係
6. 比較による意見構造 同一の1次元スケール構成	○	比較諸対象との位置づけ可能 （ボンドサンプルによる）○
同一の意見構造（1次元スケールをしない）	○	比較諸対象との位置づけ可能 （ボンドサンプルによる）○
異なる意見構造	○	構造の差異による比較諸対象 の位置づけ可能

田中(一)：そうしますと、それらの一方の極に参りましたときに、やはり国民的素質性ともいうべきものがあるような気がするのですが。私はよく申し上げるのですが、ヨーロッパ人と話ししているときと、日本人と話ししているときとで、非常に違いを感ずることがあります。ヨーロッパ人では、物事の異質性には非常に敏感で、日本人の場合は、いろいろなものの同質性に非常に敏感、これは何か国民的素質性ともいうべきものかと、日ごろ感じる人が多いのですが、そのような国民的素質性というものを表わす調査は可能なものでしょうか。

林：それはなかなか難しいかもしれませんが、そうですね、そのところはなかなか、そこまではなかなかいくのは大変なことですが、アプローチはできる。わからないわけではないと思います。その一つの解が、考への筋道という問題でこの点は出ています。素質性となるか容易に分離できるとは思えないのです。

田中(一)：どうもありがとうございました。

司会(金)：田中謙先生お願いします。

田中(謙)：北海道大学の田中です。

ちょっと感じましたのは、こういう調査においては、分析する側とそれからされる側、両方あるかと思うのですけれども、そういう意味では、国民性においても、質問項目そのものもまた国民性が変わると、質問するつくりが変わると変わってくるのではないかなという気がするのですが、そういう意味で、同じような調査をアメリカ人の立場で質問項目をつくってされるとか、あるいはフランス人の立場でされるとか、そういった試みというのは今どうなんでしょうか。

林：ないのです。それはございません。それはアメリカでそういう発想がない。しかし、アメリカ人でそういうことをやろうとしているイベンケレスという人がスタンフォードにいるのですけれども、その人はそういう発想

でやっているのです。ところが根が社会学なものですから、そういう厳密な調査で比較するという発想がないのです。そのためにその人のクエションを見ると、これはとても比較ができないというふうなクエションです。アメリカという国は、やはり研究費がこういうものに対して出してくれる国ではないです。日本は非常におうようですから、国民性研究に40年もしていますので黙ってもつけてくれるのです。それから国際比較でも、特別推進費という別枠があるのです。学術審議会が持っているそこで、わかったというをつけてくれるのです。だからできるので、普通の金を集めてはなかなかできないという気がするのです。だから、世界じゅうの金持ちがそういう意味でぱっとチームをつくって、それぞれの発想でやってみたいと思います。

田中(謙)：先ほどの話の中で、最終的にマップを見せていただいたときに、軸が二つほどできたようではすけれども、その軸自身がまた変わってくる可能性というのは、質問項目をつくる側が変わりますとそういう可能性というのはあるのでしょうか。

林：それはあると思います。当然、見方の発想がこういうふうに広げてありますけれども、もとの根幹は日本人の国民性ということから出発していますから、これはアメリカ人ならアメリカ人の国民性から出発するとこれは違った面が出てくる。それでも一致するところと一致しないところが出てくると思います。

田中(一)：ちょっと今の話と関連しまして、例えばハワイの日系人に出される同じような質問というのは、これは英訳したものですか。

林：ハワイは英文で、アメリカと同じ質問ということです。

田中(一)：アメリカと同じですね。日本人に出した質問を今度は英訳したものをハワイ日系人に出すというそういう形だったのですか。

林：その通りです。それは質問をつくるときに、日本で作った質問も多いが、その他その中のクエッションの中には、アメリカのクエッション、フランスのクエッション、ドイツで作ったクエッション全部まざっているわけですが、それから英訳してするのです。

田中(一)：私がお伺いするのは、その場合に、日本語で出した質問と、内容としては同じものであったとしても、翻訳したものとは受け取り方が違う。

林：何かしら違うと思います。

田中(一)：そうした違いは調査結果に特に影響は。

林：ちょっと今材料がここにはないのですけれども、一つに、不安がありましたから、まず日本人の中で、日本語の調査票と英語の調査票をつくりまして、それを日本人の学生に答えさせる、両方できるのは大学生しかございませんから、これは筑波と国際キリスト教大学の学生を使っているのです。慎重に考えたグループの素質性を検討できるようにしたのです。そういうふうにしてやりますと、日本人は普通の質問をすると、英語、日本語の質問でもまずそんなに違いはないのです。ところが、中間的な回答が入ってくると違う。日本語できくと、中間的な回答が60%位出るのです。英語で聞くと出ません。ほんの数パーセントしか出ません。つまり、日本人の学生に対して日本語の一概に言えないどちらとも言えないは独特の意味合いがあるといえる。

それからもう一つは、非常に賛成です。日本人は非常に賛成と絶対答えません、日本語で聞けば、英語で聞くと、ストロング・アグリとちゃんと答えます。だから、これはもう、つまり段階をきく質問では絶対違うということはこれは明らかです。ですから、段階で比較したらまずだめです。

今度は、ハワイでそれをやりました。ハワイで日本語科の大学院の学生、2、30人しかおらない。それを日本語と英語で聞いたので

す。そうすると、やはり違いがあるのです。一概に言えないというのがふえるのです、日本人が60%だと向こうは30%ぐらいは出てきます。ですから、日本語という言語の問題が、発想と結びついていると思います。これは仕方がないことであります。

こんどはドイツで行われた調査をみますと、ドイツ人は日本人と近いです。非常にいいという、非常に言いません。中間的な回答も多いのです、ドイツは、アメリカに比べるとずっと多い。この問題は後でデータを示しましょう。それからもう一つは、今度は日本人に対してアメリカで英語の調査票を全部直訳します、直訳、意識は訳ではありません。それは日本語そのものになってしまうので、直訳して日本人の調査をします。

例えば、親孝行とありますね、親孝行というなんていう英語はないのですが、親に対する尊敬と親愛、それから恩返し、世話になった人に感謝し、必要があれば援助する、それを日本語で、それで調査しました。それから筋を通すこと、丸くおさめること。筋を通すということは、物事の決定するときには一定の原則に従う。それから物を決定すると人の間の調和を図る。そういう質問で日本人に聞きます、そうしたとき、翻訳票と日本語の調査票で、15%違うのはほとんどないですね、10%ぐらいはあります。一番違うのは筋を通す、丸くおさめる。丸くおさめるというと、何か悪いことをしたような気がする。人の間の調和を図る、それは15%位、それから恩返しについて、恩返しと聞くと低いけれども、世話になって感謝するというのもこれも15%ぐらい高くなるのです。それが決定的な質問です。あとはだいたいその間10%にほぼばらつきます。

同じ質問をその二つのグループでやればぴったり一致します。高々15%ぐらいの違いではいきますので、その辺くらいのところは大丈夫ではないだろうかと思います。余り細

かいことは言うなということです。非常にかげはなれたように見えてもプラスマイナス15%ぐらい超さないというふうに理解すれば、一応比較可能性があるのではないかと思います。それをやるのに大変なんですけれども、そこまで詰めておかないと、国際比較にならないのです。だから翻訳の問題というのはやっぱり非常に難しい。

例えば、さっき言いました姦通みたいな質問は、これはもう言葉をつくり直してもらいます。誤解のないように。ディボース (divorce) 式の言葉はないのですね。訳した我々、解消すること、ゲレーセンという言葉を使います。ディボース (divorce) という言葉はドイツ語にはないのですね。その相当するものは、結婚をゲレーセン、そういう言葉になります。先祖は仕方がないですね、ある意味で、これはほかにない。わからないようにファミリーみたいのを何とかかんとかという言葉を入れなければよい。そういう細工は必要とします。そこまで外国でやってくれる人というのはちょっとないです。それほど調査に熱心な人というのは見出すことは困難だと思います。よろしゅうございますか、大体。

田中(一)：どうもありがとうございました。

斉藤：札幌学院大学の斉藤です。

先ほど、フーバー研究所のインケルスの話が出たのですが、インケルスは旧ソ連の専門家ですので、多分関心のあるところが違うのではないかという気がしたのです。それはそれだけの話なんですけど、質問したいことは二つありまして、一つは、先ほどのOHPの中に計算したものを出しましたね。それを最終的にプロットしたわけですけども、絶対値の中身を見ましたら、質問項目ですね、Kというのは質問ですね。その質問項目であるKによっていろいろ変わるわけですけども、 d_{ij} を出すとき平均を取ったわけですね。それで、ちょっと知りたいのは、非常に分散があるK

と分散が少ないKが多分あったのではないかと思うのです。そのときに、分散があるものは同じ国民であってもばらばらだと、勝手なことを考えて勝手な回答をしているということになりますと、先ほどの最後にまとめられたように、あるところでまとまるという場合は非常にまとまりがよく70%ぐらいと思いますが、また大きく違うというものもあり、Kによっていろいろ出てきたと思うのですが、違いが非常に鮮明になってきたようなKというのはどういうものかというのと、それからこの国民性でも同じで、余り差がないというKというのはどういうものかというのを聞きたいのです。まずそれが1問目です。国民性によって非常に違ってきたKというのはどのような質問事項なんですか。

林：最初、インケルスの方から申しますと、インケルスは最初は我々と非常に違っていた。彼が1988年にアメリカ・ナショナルキャラクターなど行っていた会、あのころとは非常に違った。そのうちにナショナルキャラクターと言っているものですから、それでは会って話をしようではないかということで会って、最初のうちはかんかん、がくがく、ああいう人ですから、大げんかをしてやってきた。そのうちにだんだん彼は考えを変えてきた。このころは距離が非常に近いです。びっくりしました。それで、共同研究者として統計数理研究所にしょっちゅう来ているのです。このころ考え方の違いの幅が大変小さくなりました。非常に関心の領域には近くなりました。共同研究で、アメリカ国民性の形成過程、日本とアメリカの形成過程というので、高等学校の生徒を日本語でやろうではないかということで、今は進んでいる最中です。割に近づいてきたと思ってください。彼が最近書いた、去年か今年か、ナショナルキャラクターという本があるのです。それは古い論文です。古いやつを集めた論文ですが、今書けば随分違ったものになると思うのです。

それからさっきの今度はKのお話ですね。これは全くグローバル、すべての質問です。それでどういうKによって違ってくるかというのを申しわけないですが、この表題と全く同じ本が7月に出た。岩波から、「社会調査と数量化」と括弧して増補版と書いているのです。そこにどういふKでどこが近くてどこが同じかというのが出ている、仕分けをして書いてあります。ひとつ済みませんが見ていただければ。

斎藤：一つ、二つ紹介していただいけませんか。こういうような非常に顕著な差があるという項目と、これはほとんど同じだという項目がございましたら。

林：国によって、どういふ質問によって同じか違うかその様相はそこに書いてあります。人間関係とさきほどの中間回答、宗教この三つが大いに差のある問題で、生活領域の重要性などは差が少ないのです。

斎藤：はい、わかりました。

それでは二つ目の質問なんです。先ほど最初の方で、データ解析するとき、どういふような注意をしなければいけない、英文で書かれている部分で、解析に当たってコヒーレントのアイデアで処理しなければならないという一文があったと思うのですが、その前にアイデアというのはどういふ意味なんですか。

林：それは、データによって、現象を解析しようとする理念、つまり理論をつくる、何をつくるということではなしにして、データによって現象を理解しようとするという一つの目的のもとに、すべてくみ上げていくわけです。ですから、それに使うのは社会学、心理学でもマックスウェバーでも何でもいいのです。それから哲学入ってもよろしいし、その人の経験でもいいし、そういうものから理解しようとしてデータを取り扱うというか、データをつくりデータを分析する、そういうふうなのがデータ・サイエンスのアイ

ディアという意味です。

斎藤：どうもありがとうございました。

山崎：札幌学院大学の山崎と申します。

個人的な興味に非常に合致してわくわくしながら承りました。それで、二つ質問がございいます。私事で恐縮なのですが、私、十代の半ばで英語圏に行きまして、それで1年暮らして帰ってきたのですけれども、私個人についても、周りにいた何人かの十代の方々も、行った先の国に適応するよりも、帰ってきてからもう一度日本の暮らしに適応する方が難しかったのです。それで、何ていふのでしよう、日本の国民性の中で、異文化との接触によって変わってしまいやすいような特徴と、そうでない特徴というのがもしかしたら何かあるのではないかなと思っていたのですが、もしそういうものがあつたら教えていただきたいです。それからもう一つ、これぞ中心的な日本人の特性で、これが変化してしまうと日本ではうまくやっていけないというような国民性がもしありましたら、教えていただくとうれしゅうございいます。

林：変わりやすいということと変わりにくいのと、これは当然ございいます。変わりやすい、国民性とかういふいいか、例えば、家を重んずるなんていう考えがあるとします。昔は家を重んずるのが日本の国民性だとかういふた。いわゆる家です。ところが、こういうふうな、実はそうではなかったと。現在、養子をもって家を継がせるというパーセンテージは世界的に日本人ほど低い国民はございませぬ。一番アメリカはそれでも55、6%ありますが、日本はもう十数%ですね。考えてみると、継がせるものなんか何もないですよ。マンションに住んで何を継がせるという、財産もみんな等分に分けてしまいますから継がせるものは一つもない。そういう現象が起こってしまって、家を継がせる、継がせないという以前に、現実的に継がせるものはなくなつてしまったということです。では家を重

んじないかという、これはやっぱりその質問では家を重んずるかどうかということは何もなくなくなってきたと、こういうことです。家を重んずるかどうかはわからないけれども、養子をもって家を継がせるという現象はなくなって、それを通して家の大切さというものは量れなくなってきたと、そういう問題があると思います。

ですから、表面的といいますか、影響されて外的な影響が非常に強いものはどんどん変わってきます。本当に変わるものは1年に1%ぐらいの割合で変わってきますから、40年だと40%ぐらい変わってしまいます。

ところが、全く変わらない問題というのがやっぱりある。それは人間の心の問題なんです。人間関係というのは全然変わらないです。40年間驚くばかり変わりません。はっきりものいわない、中間的な回答、全然変わらない。しかも、これは日本の最大の特徴です。

ちょっと時間ありますからお見せしておいた方がよろしいと思いますけれども、その前に人間関係でちょっと補足申し上げます。

人間関係でいろいろな質問がございます。パーセンテージが書いてありますが、上はいろいろな国ですね。パーセンテージがこう並んでいます。こんなパーセンテージ見ても、わかりにくいので、人間関係を重んじる順にランクオーダーつけました。これをいろいろな質問ありましたが合計いたしました。ランクが一番少ない方が人間関係重んずるということですね。日本、ブラジル日系人、ハワイの日系人、ドイツ人、オランダ人、フランス人、イギリス人、ハワイの非日系人、アメリカ人、イタリア人、非常にクリアな関係でわかってきますね。日系人はやっぱり日本ののです。アメリカに住んでいても、ここになるほど日本人が残っているじゃないかと。やっぱり日本の一つの特徴で、しかも、これが変わらない、やはり日本の一つの特徴ではないかと。これがなくなったら日本人はおし

まいだぞというふうには私は考えています。

さらに、さっき中間的な話ということをしました。こういう調査があります。質問は、国のあり方として、次のそれぞれの事柄より大切だと思う、どちらがより大切だと思いますか。大切だと思われる度合によって、5個のおはじきをおいて下さい。大切な方に多く、大切でない方には少なくおいて下さい。いろいろな問題がありますが、全部読むのは大変ですから、これは五つある、現在の国民の負担がふえることがあっても将来の財政の見通しで先手先手で打っていく、一つは、将来、国の財政状態が悪化する可能性があっても、現在の負担をふやさない。どちらか一方をとれば一方はとれません。日本人にこの質問をする、どっちもよくてどっちも悪い、将来の財政が破綻しない方がいい、今も負担をふやしてくれるなということです。それが国民です。だから政治は難しい、日本の政治は難しい。消費税上げる、2回目はごまかして上げたのですけれども、1回目のときはごらんのように内閣はつぶれました。そのおかげで、消費税を上げたから今こうしてやっていけるわけです。どちらか一方に3個(2個)おくのが60%。どっちにしようかなというわけです。全面に賛成なんかいやしない。2個置いて3個、3個おいて2個です。だから結果が悪ければすぐ反対でひっくり返ってしまう。東京におけるアメリカ人、ジャパントイムスのダイレクトメールから選んだ。日本にいると日本的になるかななんてこう言いながら置いてくれたのですが、それでも30%です。どっちかに割り切ってしまう傾向が強い。これが日本人の得がたき性質だと私は思っています。この調査は、現在こういう問題でやっています。

ある程度の公害や環境汚染、自然破壊など起っても、経済のゆとりや快適な生活のために電力供給をふやす。公害や環境汚染、自然の破壊を抑えるために経済力は低下し、生活

の不便を我慢しなければならないなっても電力供給をふやさない。難しくてどっちにしていかわからない。だけれどもどっちかにしなければいけないのです。結果は2個(3個), 3個(2個)が60%ということです。どっちもよくてどっちも悪い, こういう性格があるわけで, これも私は得がたき性格だと思うのです。ひどいことはできない, 少し宛やわらかくやりながら自然破壊していくわけです。これがしかし人間の知恵です。人間が存在する以上, 絶対自然破壊をしなければ生存できないですから, どっちがいいからといってばあっとやったら経済成長ではありませんけれども, アメリカのTVA計画みたいなもの, テネシーヴァレーのあれみたいなものをしてしまえば, 大変な自然破壊です。日本がそれを真似してダムをいっぱいつくっていたわけです。そうではなく, ちくちく壊していく, それが人間の知恵です。危険の分散なんですね。そこが得がたき性質の正体, これを諸外国に比べたらどうなるかというわけでございます。こんなこと諸外国ではとても質問はできませんから, 中間回答を放り込みました。それで中間回答放り込みまして, 外国で調査して, 中間回答の数と数えたのです。それで中間回答をどの程度か測ることにしました。日本人は中間回答が多いですね。一番はっきり物を言うのはアメリカとオランダです。日本に近いのはドイツ, やっぱり極端に表現したいということで, 人間関係と近いのです。

では, 日系人どうなんだと。日系人にでももちろん英語やポルトガル語で聞いているのです。これが日本ですね。これがハワイの日系人, 英語で聞いてもはっきり物を言わないです。それがおもしろいところです。日本人の特徴です。ブラジルの日系人ははっきり物を言うのと, そうでないタイプがあるのが見えます。はっきり物を言う。これは1世, 1世がオーヴァー・アダプテーションしてしまったら, はっきりものを言うのです。ところが

1世でも, おれはあくまでも日本人というやつはちゃんとあいまいに回答しているわけです。2世になるとハワイの日系人に似てきます。こういうふうな特性というものが出てくるわけでございます。それでこの特性がこういうふうな日本人の質問がいろいろございしますが, 中間的回答が日本人はふえているか減っているか。これは40年間減っていることはない。むしろ増加傾向にある。減っているものはないという表現の方がいいかもしれない。同じぐらいのものがございしますがみんなふえている。今度は年齢別にすると, 現在若者はどうかと。若者ははっきり物を言いません。非常に中間回答です。これも得がたき性質の一つでなからうかと思えます。変わらないですね, これは変わらないと思えます。そういうことで, 特徴でありながらこの二つが変わると日本も危ないなという気がします。

もう一つは, これはいろいろなことで調査ではございませぬ。調査ではなかなかそれをなかなか聞きにくいですが, いわゆる日本人では建前と本音うまく使い分ける場合がございしますが, これが非常に得がたき性質でございませぬ。これは建前だけの社会になると大変でございませぬ。アメリカ, オランダであれば建前社会, 本音はないかという本音はあるのです。言葉もちゃんとある。建前はフロントステージ, 本音はバックステージ, なかなかそれは教えてくれなかった, 2世のもう80ぐらいの大先生にそういうものをないということが本当だろうか聞いてみました。いや, そうではない, ある, あるとこういうのだというふうに教えてくれました。ですから, 建前社会なんですよ。建前社会だけれども本音がある。ないのではない, ある。あるけれども, それが表に出せない。そのためか, 非常に病気が悪くなって心臓病, 虚血性疾患がものすごい多い。カウンセリングの費用が医療費の20%を占めている。非常に苦しい社会でございませぬ。本音がなければいいのです, あ

るから問題なのです。このごろ日本がそんなこと、本音の建前使い分けは、悪い悪いといっている。世界にないのだと思ったら大間違いでして、これは大いに使い分ける必要があって上手に使い分ける。建前と本音が使い分けられなくなるようになると節度を失う。それで野村とか第一勧銀とか、ああいうばかな問題がございます。本音と建前をうまく使い分けて節度を心得ていればああいうことにはならない。絶対日本人はあの世界はなくならないです。経営者が節度を失ってきたから、ああいう問題が起こってきた。さっぱり経済が発展しないなんていうことになるのではないかと思います。これも危ない社会ではないだろうか。今調査がございませぬ。これはなかなか調査は難しくて調査ができない問題です。だけれども、現象観察ではそういうことだと理解してください。

田中(一)：今のこと関連して簡潔に伺いたいのですが、一卵性双生児が異なる環境に育った場合を選んでいろいろな気質や体質の遺伝率をいろいろ調べている。先生もちろん御存じだと思っておりますが、その結果によりますと、例えば比較的冷たい性格や比較的暖かい資質、そういうものの遺伝率は非常に高い。背が高い、低いと同じぐらい並んで極めて遺伝率が高いということがありますが、中間的な志向というそういうタイプもまたどちらかというかと、遺伝的気質に近いような内容を持ったものと考えたら、先ほどお話にあったデータを理解するのに理解しやすいのですが、そのようなレベルのものだとは考えられないでしょうか。

林：お話のとおりのように思います。私は考えられることと思います。これはこういう調査がございまして、宗教を信ずるかという問題がございまして、宗教を信ずるか、信ずるといふ日本人は少ない、30%で、これは現状で見ると、若い人が少なくて年寄りが多いのです。そうするとこれを40年間続けてみるわけ

です。そうしますと、ほとんど1本のカーブ、ちょっと幅がございますが一本のカーブ、ということは年をとると宗教を信じる、加齢すると宗教を信じる、こういうことなのです。オランダでは、どういう宗教機関に属しているかという質問で100年ぐらい続けられています。これは国勢調査に入っているものですから、そこで聞く。そうすると、現状のデータを見ると、高年齢ほど宗教を信じるのが高いです。やはり日本と同じで。それで、私の友人はその先生に言ったというのです。オランダでも年をとると宗教を信じるようになるのですねと聞いたのです。そうしたらですね、向こうは何を言っているかわからない、質問の意味が、理解できない。

つまり、その人は英語が下手だと思って一生懸命やったのだそうです。ところがどうしても通じない。そのうちにわかったのですね。お前はとんでもないことを言う。宗教は年をとって信じるようになるものではないのだ。宗教は宗教教育によって信ずるようなものになる。昔は宗教教育が強かった、今弱くなった。だから今信じるのが少ない、これを聞いたのです。年齢コーホートのみがきいているのです。データ分析するとそう出ます。びっくりしたのですね。

年をとると宗教を信ずるなんて日本だけの固有の現象なんです。いよいよこれをハワイの日系人でやってみようではないかとなりました。ハワイの日系人でそれをやった。これを仏教信者とそれからキリスト教信者に分けました。それで同じ分析をすると、仏教信者は日本人と全く同じです。年をとると宗教を信ずるようになる。今度はキリスト教信者はですね、コーホートをとるとそれから年をとるとまざって出てきます。それを見まして、アメリカという環境と、やはりキリスト教という環境と日本人というものがやっぱりまざっているのだなということが解ります。宗教の性格、生活と民族性というのがやはりま

ざっているのだなというデータが出てきたわけです。先生のお話と非常に近い話でありまして、そういう遺伝を受ける面があるのですね。

井上：札幌学院大学の井上と申します。

私は、社会学をやっているものでして、一つだけお聞きしますけれども、国民性という概念をどれくらい実体のあるものとお考えですか。暫定的なものとしてお使いになっているのですか、それとも、それが何らかの実体を含んでいるというふうにお考えなんですか。

林：さて、そこは非常に難しい。理論的には操作的概念と言うべきでしょう。しかし、これでは冷たすぎますね。

井上：例えば、アメリカ合州国と一言でいっても非常に多様な人が集まっていますね。

林：本当は実体とは言いたくはないのですが、けれども、どうも、しかし、先ほど素質という概念まで含めるならば、やはり存在すると思えますね。それはどういうふうにして形成されてきたかなんていうことになることは難しくくてとてもわからないと思えますが、現状を比較して考えたならば、そういうものが存在するとして行動した方が私にとって誤りが少ないと、思います。あるいは世界を見る目として誤りが少ない。そういうふうにかえたいと思えます。

井上：でも階層的なものとか民族性とか、さまざまなファクターが効いて「国民」というものが成り立っているわけですが、複合的なものとして国民国家というものができ上がっていくわけですから、とりあえずということで国民性というカテゴリーで分類しているわけですか。

林：民族と国家、それちょっと別問題が起こってくると思えます。民族と国家がこういう時代になってきたものですから、民族と国家が一緒にならないと紛争が絶えないような時代になってきました。しかしながら、一つの民族として、国家として形成し得る能力が

あるかどうかという問題が返ってきますね。そうすると、能力がない、なければ一緒になってつくるより方法がないではないか。それで紛争を繰り返すというのがこれからの世の中ではないでしょうか。だから私は紛争は絶対なくならないと思えます。それはなくならないし、なくなると思うということがそもそも間違いと思えます。そういう違った民族が国家をつくるにおいて、何を譲歩したらいいかということを考えていくより仕方がない。

それを簡単に、それでは民族国家つくる、それはできっこない。それでは違ったものを集めて国を形成することになる。選挙しようが何をしようが負けた方が支配されるわけです。数少ない方が負けます。支配されるのです。選挙されるわけですから、しかし問題が起こってくる。だけれども、何の点でそれを調和するかということですね。そのことには一つの解明をアメリカにしてもらいたい、アメリカはあれほどの移民族がなぜ一つにまとまり得たかと。そこを考える必要がある。

そうすると、それは彼らの一つの国民性になってしまったのですけれども、つまり建前社会です。すべて建前で動くという社会です。言葉で表現されたものはすべて真実である、それ以外何もない。それから宗教の自由、それを認めたときに、国家として成立するけれども、大変息苦しい国家だと思えますけれども、支配よりはいいのではないかという気はしていますけれども。

井上：そのお話はわかるのですけれども、私が聞きたかったことは、分析概念として、国民性というのがどこまで有効なのかというふうなことだったのですけれども。

林：そういうことです。今言った有効ということを見ると、お互いに同じこと違いということを知ることが非常に根本ではないかと思えます。それは、先ほど言いましたように、物の見方であり、考え方であり、感じ方ですね。それはいろいろ違うところと同

じところがある。同じだと思ってすべてを行動するなということ。すべて違ったものとして行動する。そういう意味で僕は非常にインスルメンタルな考え方ではないだろうかと思います。国民性は一人一人の問題ではなく集団概念として最初に話をした点で有効なのだと思います。

井上：社会学者というのは少々ひねくれた物の考え方をする人種として、例えば日本人特殊性論がなぜはやってしまうのか、需要されてしまうのかというふうな形で物を考えていったりするのですね。非常に危ない議論につながっていくようなリスクを国民性という概念、あるいは県民性という概念もそうかもしれないけれども、国民性についての議論は有しているのではないかと感じてしまうのです。

林：確かにそのとおりでございますね。けれども、やむを得ないのではないですか。

司会(金)：そろそろ時間ですので、1人だけお願いいたします。佐藤さんどうぞ。

佐藤(将)：今問題にしている国民性というのは、先ほどの話からすると、個々の国民の特性ではなく、集団としての国民の特性と定義されていましたね。ですから、今の井上先生とのディスカッションはどこに焦点を置いているかで、噛み合っていないのではないかと、国民の集団的な性格として定義された国民性は、国際交流だとか外交関係のあり方など、ある国に対して一般的にどういう態度で接するかなどのメジャーにはなるけれども、その国民の個人レベルの理解には必ずしも有効ではないだろうと思います。お話に出てきた分析やその内容は、データ処理の方法や定義に立ち戻って議論しなければいけないのではと感じます。

司会(金)：まだ御質問があるかと思いますが、既に時間が過ぎましたので、明日にお願いいたします。ここで午前中のプログラムを終了させていただきます。

林先生、どうもありがとうございました。
(拍手)